

情報肥満からの脱却



後藤 健市 (ごとう けんいち)

場所文化クリエイター (地域活性化伝道師)

1959年帯広市生まれ。高校卒業後、札幌、東京を経て米国に留学。その後、ベンチャー企業(東京)にチーフディレクターとして参加し、国内家電メーカーの草創期のワープロやパソコンのセールスプロモーションを担当。86年に帯広に戻り、社会福祉事業に携わりながら、同時に地域づくりに取り組み、北の屋台、スノーフィールドカフェ、場所文化フォーラムなどの立上げや運営、食をテーマに地域活性化に取り組む会社設立に関わり、場所の価値を生かした地域づくりの企画・提案、実践を行っている。

朝起きるとテレビをつけ、コーヒーを飲みながら朝刊を読む。会社に出勤すると、経済紙に目を通し、会社が終わったら、駅で夕刊紙を買い、電車や地下鉄の中で読む。さらに、寝る前にテレビのニュースで最新情報をチェックする。

ごく普通の人のごくごく普通の1日のように思えるこの状況に、今から10年ほど前、ふと疑問を感じた。

私たちは1日にどれだけの情報を得ているのか。そのためにどれだけの時間を費やしているのか。その中に本当に必要とする情報はどれだけあるのか。

情報の変化がもたらした“情報肥満”

テレビが一般的ではなかったころ、人々は新聞とラジオから情報を得ていた。新聞は活字なので、自分の手に取って読まない限り情報は得られない。しかし、ラジオの情報は耳から勝手に入ってくる。いつの間にか、床屋さんや美容室、商店や事務所などではラジオを流しながら仕事をするようになり、この垂れ流しの情報システムが、私たちと情報の関係、さらには情報そのものの質や役割を大きく変えていった。

その後、テレビが登場し、情報入手手段に視覚が加わり、処理できる情報量が急激に増えた。さらに、インターネットが登場し、必要な情報を、好きな時に、世界中から瞬時に入手できる環境が整った。まさに高度情報社会と言える環境だが、その中に生きる私たちは、情報をコントロールしているつもりが、いつの間にか情報にコントロールされる側、言い換えると“情報中毒”に陥り、“情報肥満”になってしまった。

必要以上の食料(カロリー)を摂取するから肥満になる。大きくなった胃袋や身体は、食欲をコントロールする脳さえもまひさせ、さらに大量に食べ続ける。そして、身体はバランスを崩し病気になり、最悪の事態は死に至る。これと同じことが情報にも起こっていると私は思っている。必要以上の情報を入手しているうちに脳がまひし、「知っている」ことだけが何よりも優先され、自分に必要な情報が何であるかを考えることなく、流れてくる情報をむさぼり続ける。

情報の流れが少しでも止まると、不安になり、新たな情報を得ることに必死になる。その結果、内容への関心はさらに薄れ、新しい情報を次から次へと追い求め続ける。朝起きてから、夜寝るまで、情報摂取は延々と続き、情報肥満はさらに深刻化していく。

このままではやばい。私たちの情報感度はどんどん鈍り、情報判断力が低下し、それが身体や心のバランスを崩すことにつながり、やがて命までを脅かすようになると思う。(自分だけではなく、他人の命まで)

正直者がバカを見る

話は変わるが、ニュースや国会中継などを見ていて、「正直に答える」ことで問題が大きくなった人と、「正直に答えない」ことで問題が大きくなった人を同じ土俵で語っていることに私は疑問を感じる。

誠実とか、正直というのは、今の日本には必要なくなってしまったのか。覚悟のない「正義」を振りかざし、無責任な批評や評論を繰り返し、自分たちが裁く対象、暴く内容を捜し求めている今の状況のままでいいのだろうか。

裁判員制度が始まったが、実際に罪を犯しても弁護士の手腕次第で無罪になったり、いちゃもんみたいなことで大企業を「有罪」にし、多額の賠償金をもらうような仕組みは日本に持ち込むべきではないし、そういった裁判は日本にはなじまないと私は思っている。

悪いことは悪い。いいことはいい。悪いことをしたらしかられ罰を受け、いいことをしたら褒められるという当たり前のことが私たちの社会から消え失せつつある。うそをつくことは罪であり、「うそは泥棒の始まり」ということをつい数年前までは言ってきたはずなのに、今は「うまくうそをついたやつ」が勝ちであり、正直者が馬鹿を見る社会になっている。「記憶がありません」というのは「正直に答えると不利になるし、うそをつくこともできないので…」ということだと知りながら、私たちはそれをそのまま受け入れている。

一般社会で「記憶にない」は通用しない。黙秘権と

いうのもあるが、「だんまり」を決め込んでいて罪を逃れることはできない。しかし、政治の世界では、そのまま時間が過ぎ、みんなの興味がそれるまで、次の事件が起るまで静かにしていれば忘れてくれるし、許されるということが起こっており、マスコミも、私たちもそれを許してきた。このことが、今私たちが抱えているさまざまな問題を生み出してきた根本的な原因ではないのか。

8月30日の衆議院総選挙の結果、政権交代が起こったが、政治は自らの仕組みを変えることができるのだろうか。多くのマスコミは国民が「自民党政治」にノーを突きつけた結果だと評したが、日本の政治が構造的な限界に至ったのは、自民党や自民党の政治家のせいだけではない。その原因は国民にあり、地域住民である私たち自身の中にあるということを今こそ再確認することが必要である。

自分の責任を自覚することから

川下りをしている時に川面を見ても“流れ”は分からない。川岸を見れば自分が動いていることを視覚で確認できるが、それは見て分かったつもりになっているだけで、流れの強さや温度を感じるには、川に入らなければならない。

情報の流れも同じこと。情報という川を下る“カヌー”から降り、流れの中に身を置き、その情報の速さや温度(冷たさや温かさ)を体感し、その上で、自分が本当に必要としている情報が何であるのかを考えてみる必要があるのではないだろうか。

民主党政権の誕生は、何を意味しているのか。私たちは、住民として今、何をすべきなのかを自分の体と頭でじっくり考えてみるべき時が来ている。

そして、私たちが、住民として、市民として、国民として、それぞれの“自分の責任を自覚”することから“情報肥満からの脱却”が始まり、日本の新しい形が生まれてくるのだと思う。

